

難民支援プロジェクト

3 誰も“生きがい”や“希望”が必要だ



4月20日市川市富貴山小学校に



カクマのサッカーチーム 地区大会に優勝した

4月17日歓迎会 ラカウ選手のあいさつ

「わがわがプロジェクトのみならず、私はこの歓迎会で皆さんにお会いできてとても嬉しいです。私を長野オリンピックマラソンに招待して下さいことに關しては、お礼の言葉もありません。心からお礼申し上げます。

わがわがプロジェクトは私を砂漠から救い出してくれました。私がいたカクマ難民キャンプは、日本の気温は4℃をこえ、人々は強直や病気、食料不足といった多くの困難に直面しています。そんな状況にあって、私の人生も生と死のはざまにありました。

しかし、わがわがプロジェクトは、私がマラソントレーニングをするのを支援し、そして長野オリンピックマラソンに出場させてくれました。私は本当に幸運です。」

4月20日歓迎会 子供たちとの交流

校長先生のお話、「今日は、先の長野マラソンに出場された外国から来たお客様をご紹介します。

エチオピア出身でケニアに難民として住んでいる方です。難民という過酷な境遇にも負けず、日夜マラソンのトレーニングを積み、プロのランナーを夢見て頑張っているのです。盛大な拍手で迎えて下さい。」

それを受け彼等は、母国語であるアムハラ語であいさつし、ハニガミながら話すラカウさんとデビサさんに子供達のはらけを話してあげた。

教務主任の先生。「皆さん、お待たせしました。これから各学年ごとに



昨年のワークキャンプで建設した図書館にも完成

グラドを2周つづ、デビサさんとラカウさんと一緒に走りま〜す。一年生からはじめ〜」

アナウンスに子供達は大喜びを上げ列を組スタート、何を勘違いしたのか2・3人の子が、彼等を抜き去り、真剣な顔で前を走りぬげ、運動会のように先生や回りの取材の方も大笑い！和やかな雰囲気でもランニング交流は、無事終了。彼等の回りには、幾重にも子供たちの笑顔の輪がで、握手を交わす。

カクマ難民キャンプでの取り組み

これまでもキャンプの子供たちや若者を支援する事業を実施してきた。昨年は、建設事業として図書館を建設。広大なキャンプ内の2つの図書館として難民の人たちに重宝がられている。

また、日本からのボランティアチームが直接現地へ建設作業に参加するという形が、難民の人たちからの好評を得ている。身体教育の分野では、キャンプ運営NGOであるLWFFの教育部門と協力し、この分野の充実化を模索。昨年、種々のテストプログラムを実施したことにより、今年からの本格実施の準備が整ったといえる。青少年の活動の分野では、スポーツ・芸術・演劇・相互理解などの活動の機会を提供し、青少年の人格形成において、主要科目しか用意されていない現在のキャンプ内の学校教育を補完する機能を果たしてきたといえる。

第9回 2001年度古着支援報告 古着の支援

ありがとうございます

今年は、昨年同様、タンザニアのキボンド難民キャンプとエリトリアを中心に古着の支援を行いました。2年間支援していたカンボジア赤十字が必要ないとのことでしたので新たにインドネシアの教会に1000個を寄付し、7/28に現地に到着致しました。

いままではすべて無料で配付していましたが、インドネシアでは教会のパザールを中心に安く販売して、それで得たお金を学校などの教育活動に寄付することにいたしました。ご理解のほどよろしくお願ひいたしました。

今年、キボンドにゆく予定でしたがMさん(在日、大学生)はベトナム難民であるためパスポートがなく、タンザニアの入国ビザが取得できず中止せざるをえませんでした。そのためにタンザニアの古着寄付の様子を皆様にお届けできませんことご了承ください。

●支援先:

- キボンド難民キャンプへ40フィートコンテナ3本と20フィートコンテナ1本
- エリトリア難民へ40フィートコンテナ1本
- インドネシアの教会へ20フィートコンテナ2本
- 寄付古着: 5、739個
- 募金金額: 710万円(7月1日現在)
- 募金口数: 1、231件



仕分け作業



教会でのパザール

カンボジア学校建設プロジェクト

4 学校にいかせることができるようになり嬉しい!



619人の生徒のために



今年の2月19日から3月3日にかけて日本から6名の若者が参加してDak Pour Village, Kraing Diva Commune, Phnom Srouch District コンボンスプー県プノムスロー郡クレイングヂヴィアのダクポール村の小学校建築に取り組みました。

この学校は、東京豊島ライオンズクラブの資金援助で建設されました。建築の予算は10,772ドル、130万円でした。感謝!

その他2校の建設の資金を援助いたしました。Sangka Satop Village and Commune, Ordi District (4 classrooms) Banthey Rokar Village, Kraing Divai Commune, Phnom Srouch District (5 classrooms)

この支援により、オーラルとプノムスロー郡の人里離れた8つの村の619人の子供たちに初等教育を提供することができるようになりました。

3つのレンガ組みの小学校の建設と、9人の教師の養成を行い、この地域の300人の貧しい子供たちに奨学金を与えています。

初めてのカンボジア

三重野志穂 (ワークキャンプボランティア)

学生の頃から何故かカンボジアという国に魅かれていた。何故だかは分からない。コンボンスプーのLWSO事務所について外を眺めたとき、あまりのきれいな風景に涙が出たことになった。なんの変つてもない風景。ただ山があり、ぽつんと学校が建っておりその近くに、ひまわりが咲いているのみであった。しかし、工業国日本では、この当たり前とも思えるような風景を目にすることは、もうできないかもしれない。

ドキドキしながら、村へ向かった。不安な私たちを迎えてくれたのは、日本という肝っ玉あちやんであった。どこの国も、母親は強しと思った。一番会いたかった子ども達の姿が見当たらない。と思うが先かどんどんどこからともなく子どもたちが集まってきた。恥ずかしそうにながら。子どもたちの目は、とてもキラキラ輝いていた。物事をまっすぐとらえれる澄んだ瞳だった。

村人はとにかくよく笑った。私が生きてきた中でこんなに笑った日々はないだろうと思うくらい、私も笑った。たわいもないことで村人は、みんな笑い共有していた。「なぜ、こんなに素直に笑えるのだろうか」という疑問が湧いてきた。しかし、考えだすだけ無駄なことだと思った。村人には、何のしがらみもなく、笑いたから笑うのだ。そんな単純なことにさえも、理由を見いだそうとしていた自分が、恥ずかしくなった。

夜は每晚、村人が宴会を設けてくれた。私は、お酒が入ると踊ることは日本ではよくあることだった。しかし、村人は、お酒なしでもバテンション!!これには驚いた。それこそ一晩中踊り明かす勢いであった。心から私たちを歓迎してくれて



完成した学校

ブロックつくりからはじめ

ワークキャンプ参加者と子供たち

いるのがよくわかった。本当にうれしいことであった。踊りや楽器の演奏の仕方を教えてくれ、本当に楽しい時間をわかちあえた。

しかし、このような暖かい人間性と同時に、彼らの厳しい現実を目のあたりにしたとき、私は涙が止まらなくなった。私たちが滞在していたある日、LWSOから子どもたちに文房具の支給が行われた。支給される順番は、経済的な面から5段階に分けられた貧しい子どもからであった。一番貧しい子どもは、両親がおらず、同じ村の家庭が養ってくれているということだった。明るい子どもたちの笑顔の下に、このような厳しい現実が隠されておられ、その現実を子どもたちが子どもに受けとめていることをしり、自分の浅さを知った。

彼らに学校ができることが本当に彼らのためになるのか?そんな疑問さえ生まれてきた。今の日本にたが子どもりで笑う余裕さえなくなる国になってしまうのでは…と。

リーダーが言った。「勉強は誰にでも与えられた、平等なチャンス。それに彼らは学校を望んでいるよ」と。日本に帰国してからは、日本の現実が待っていた。いろんなことをばかばかしと思う自分がいる。でも、すべて現実。要は、自分の経験、感じたことをどれだけ大切にし、伝えていくかである。



折鶴の作り方を教える大塚さん